

ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む

—「規則」に係わる部分—

黒 崎 宏

以下は、ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』の中で、特に「規則」に係わると思われる或る部分を、独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに、読み且つ解説したものである。私としてはそれなりに、一点の疑惑も残さずに、読み解きたいのである。徹底的に解読したいのである。そのかわり、冗長であると思われる所や強引であると思われる所も、あるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。なお、[ ]は私の挿入である。また、[ ]をとばして読んでも、文章は通じるようになっている。原文のイタリックにはアンダーラインがつけてある。

197. 「あたかも我々は、語の全使用を一瞬の中に把握することが出来るかの如くである。」——我々は確かに、我々の語の全使用を一瞬の中に把握する、と言う。即ち、確かに時には我々は、我々がなす[語の理解という]事をその様に記述するのである。しかし[ここに]生じている事には、驚くべき事も奇妙な事も、全く存在しない。奇妙な事が存在するとすれば、それは我々が、[その語の]未来における使用[(原語は「展開」)]は、何らかの仕方での把握の行為の中に現在既に存在しなくてはならず、とは言えしかし、その未来における使用[(原語は「展開」)]は、現在は[勿論]存在しない、と考えるように我々が導かれるときである。——何故[そう考えるように我々が導かれるの]かと言えば、[一面において]我々がその語を[今]理解したという事には何の疑いもなく、しかも他面、その語の意味はその語の使用の中に[示されるので]ある[が、その語の使用は未来においても展開されるのである]から。[今、或る語を理解したという事は、今、その語の意味を把握したという事である。そしてそれは、今、その語の全使用を把握したという事である。ところが、その語の全使用にはその語の未来における使用も含まれている。したがって、今、或る語を理

解したという事には、その語の未来における使用の把握も含まれているのである。それ故、今、或る語を理解したという事には、その語の未来における使用が、何らかの仕方では、現在ただ今、既に存在してはならないのである。しかし勿論、未来における使用は未来における使用であって、現在における使用ではない。かくして我々は、奇妙な事態を突きつけられる事になる訳である。未来にあるべきものが現在になくはならない、という、奇妙な事態を突きつけられる事になる訳である。] [この論点をチェスを例にして示すと、以下のようなになる。] 私が今チェスをしたと思っている、という事には疑いがない；しかしチェスというゲームは、その全ての規則（等々）によって、チェスなのである。[そして規則は、ゲームにおいて示されるのである。] したがって私は、私が [今] どんなゲームをしたと思っているのかを、私がゲームをしてしまう迄は、知らないのか？ 或るいはそうではなく、全ての規則は、私の [チェスをしよう] と意図するという行為に、既に含まれているのか？ さて、[チェスをしよう] と意図するというこの行為には [チェスという] この種のゲームが通常は続いて起こるといふ事を、私に教えてくれる経験が存在し、それ故そうは言っても [——即ち、私が [今] どんなゲームをしたと思っているのかを、私がゲームをしてしまう迄は、知らないのか？ と言っても——]、私が何をしようと思図しているかは、確かではあり得ないのか？ そして [当然考えられるように]、もし、私が何をしようと思図しているかは確かではあり得ない、という事が無意味であるならば、——意図するという行為と [それによって] 意図される事との間には、如何なる種類の超強力な結合が存在するのか？ —— [そして例えば、] 「チェスを一番やろう！」 という言葉の意味とチェスの全規則の間を結ぶ結合は [一体] 何処にあるのか？ ——さよう、チェスの規則表に、チェスを教える事に、チェスの

日々の実践に、である。

198. [(対話者はこう言う：)]「しからは、如何にして規則は私に、私はここにおいて何を為すべきかを、教える事が出来るのか。たとえ私が何を為そうと、それでもそれは、何らかの解釈によって、その規則に一致させられ得るのである。」—— [(これに対し、ウィトゲンシュタインはこう反論する：)] 違う。その様に言われてはならない。そうではなく、次の様に言われなくてはならない：如何なる解釈も、それが解釈するものと共に、空中に浮かんでいるのである；如何なる解釈も、それが解釈するものの支えの役は、果たし得ないのである；解釈だけでは、[それらをいくら連ねても、それらが解釈するものの] 意味は決定しないのである。[したがって、如何にしても規則は私に、私はここにおいて何を為すべきかを、教える事が出来ないのである。(これは後に、第 201 節において、「我々のパラドックス」と言われるものである。)] [(ウィトゲンシュタインは、「如何にして規則は私に、私はここにおいて何を為すべきかを、教える事が出来るのか。」という事について、それが不可能であるという対話者の理由についてのみ、反論しているのである。したがってウィトゲンシュタインは、このパラドックスを「我々のパラドックス」と言うのである。)]

[(これに対し、対話者はこう答える：)]「だからこそ、たとえ私が何を為そうと、私が為した事は、規則に一致させられ得るのではないのか。」—— [(これに対し、ウィトゲンシュタインは言う：)] そうではない。そう言われてはならない。そうではなく、] 私ならば次の様に問う：規則の表現——例えば、道しるべ——は、私の行為と如何に関わっているのか、両者の間には如何なる結合が存在するのか？ ——さて、[これに対する解答は、] 例えば次の様である：私はこの記号に対して一定の反応をするよう

に訓練されている、そして、私は今その様に反応するのである。

〔(対話者は言う。)] しかし、その様な答えでは、君はただ、[両者の間の] 因果的結合を述べているだけであり、また、如何にして我々は今や道しるべに従うという事になったのかを説明しているだけであって、この記号に従うという事が本来何において成り立っているのかを述べてはいない。〔(ウィトゲンシュタインは言う。)] そうではない。私はまた次の様な事をも指摘したのである：人は、道しるべの恒常的使用、道しるべの慣習、が存在する限りにおいてのみ、道しるべに従うのである。

199. 我々が「規則に従う」と呼ぶものは、ただ一人の人がその人生においてただ一回だけでも行なうことが出来る何かで [あり得るで] だろうか？ [答えは否である。] ——そして勿論これは、「規則に従う」という表現の文法についての注釈である。

ただ一人の人がただ一回だけ或る規則に従った、という事はあり得ない。ただ一回だけ、或る報告が行なわれた、或る命令が与えられた、或るいは、理解された、等々、という事はあり得ない。——規則に従うという事、報告をするという事、命令を与えるという事、チェスをするという事、これらは慣習（[恒常的] 使用、制度）である。

或る命題を理解するという事は、或る言語を理解する事である。[そして] 或る言語を理解するという事は、或る技術に習熟する事である。

200. [(対話者は言う：)] ゲームという事を知らない民族において、二人の人がチェス盤に向かって座り、チェスの対局における駒の操作をする、しかも [当然起こるべき] あらゆる心的随伴現象を伴って、という事は、勿論考え得ることである。そして、もし我々がそれを見れば、我々は、

彼らはチェスをしている、と言うのではないか。[(これに対し、ウィトゲンシュタインは言う：)] しかし君はここで、チェスの対局が、或る規則によって——例えば、叫び声をあげたり、足を踏み鳴らしたり、といった——通常はゲームを連想させない一連の行動に翻訳される、と考えよ。そして今や彼ら二人は、[先に述べた様に、] 我々がよく知っているチェスの形を演じるのではなく、叫び声をあげたり足を踏み鳴らしたりしなくてはならないのである；しかもその振舞は、[たとえそれが何であれ、] 然るべき規則によって或るチェスの対局に翻訳され得るのである。この様な場合でもなお我々には、彼らはゲームをしている、と言う傾向があるであろうか；人は、如何なる権利で、そう言えるのか。[如何なる権利でも、そうは言えない。]

201. [(対話者が提示し、ウィトゲンシュタインが対話者とは別の理由で認めた)] 我々のパラドックスは [、対話者の形では] こうであった：規則は行為の仕方を決定できない、何故なら、如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るから。[(第 198 節を参照。)] そして [対話者の理由についての私の反論に対する対話者の] 答えは、こうであった：「[だからこそ、たとえ私が何を為そうと、私が為した事は、規則に一致させられ得るのではないのか。] しかし、] もし、如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るならば、如何なる行為の仕方もその規則に一致しないようにさせられ得るのであり、それ故ここには、一致も不一致も存在しない。[(これは、対話者の答えからの必然的帰結である。)]

[しかし] 「もし、如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るならば、如何なる行為の仕方もその規則に一致しないようにさせられ得るのであり、それ故ここには、一致も不一致も存在しない。」という事には或る

誤解がある。この事は、我々はその思考過程において——それぞれの解釈が、その背後に再び或る解釈を考える迄は、少なくとも一瞬は我々を安心させるかの如くに——解釈に次ぐ解釈をしているという事の中に、既に示されている。この事を通して我々が示すことは、こうである：規則の或る把握があるが、それは、[規則の] 解釈ではなく、[規則の] その都度の適用において我々が「規則に従う。」と言い「規則に反する。」と言う事の中に現われるものである。[規則は行為において示される、という訳である。]

それ故に、規則に従う行為はすべて解釈である、と言う傾向が存在するのである。しかし人は、規則の表現を他の表現で置き換える事のみを、「解釈」と呼ぶべきなのである。

202. したがって、「規則に従う」という事は [、解釈ではなく] 実践なのである。そして、規則に従うと信じる事は、規則に従う事ではない。そしてそれ故、人は規則に「私的に」従うことは出来ない。何故なら、さもないと規則に従うと信じる事が、規則に従う事と同じ事になるうから。

203. 言語は迷路である。君は、或る方面から来れば、勝手に分かっている；[しかしもし] 君が、その同じ場所に或る別の方面から来れば、もはや勝手に分からないのである。

204. 実際のところ、例えば私は、誰にも決してやらしてもらえない或るゲームを考え出すことが出来る。——しかし、以下の様な事も可能であろうか：人類は決してゲームをやったことがなかった；しかし [その様な人類の歴史において、] 一度だけ或る一人の人が、誰にも決してやらしてもらえないであろう或るゲームを考え出した。[その様な事は、勿論、可能ではな

い。]

205. [(対話者は言う。)]「心的過程である意図については慣習や技術の存在は必要ではない、という事、そしてそれ故、例えば、さもないとゲームが行なわれない世界において、或る二人の人が——或る対局のほんの初めの部分のみであろうとも——チェスの対局をし、そして邪魔[が入って、その先の遂行が出来なく]されてしまう、という事は考え得ることである、という事、は、確かに注目に値する[のではないのか?。]

[(ウィトゲンシュタインは言う。)]しかしチェスというゲームは、或る規則によって定義されているのではないのか? [その通りである。]そして[そうであるとすれば]その規則は、チェスをしようと意図している人の心に、如何に存在する[と言う]のか? [チェスを定義している規則は、チェスをしようと意図している人の心に存在する訳ではない。だからこそチェスの存在には、慣習や技術の存在が必要なのである。]

206. 或る規則に従う、という事は、或る命令に従う、という事に似ている。人は、命令に従う様に、訓練され、[その結果]命令に或る一定の仕方で反応する[様になる]のである。さてしかし、命令と訓練に対し、ある人はこう反応し、他の人は別様に反応するとすれば、どうであろう? この場合、誰が正しいのであろうか? [誰が正しいとは言えないであろう。]

君が探検家として、君にとっては全く未知の言語を持った[人々が住む]見知らぬ土地へ着いた、と考えよ。[この場合、]如何なる状況が成り立っているときに、君は、彼らは命令を与えている、命令を理解している、命令に従っている、命令に反抗している、等々、と言うのであろうか? [こ



れに対する答えが、次のパラグラフである。]

[人類には] 共通の人間の行動様式が [あり、それが言わば] 座標系なのであって、それに基づいて我々は、未知の言語を解釈するのである。

207. かの [見知らぬ] 土地に住む人々が、通常の人間の活動を行ない、そしてその際、分節を有する或る [音声] 言語を利用している様に思われる、という事を想像せよ。もし人が彼らの活動をよく見れば、その活動は理解可能であり、我々には「論理的」であると [さえ] 思えるのである。しかし、もし我々が彼らの [音声] 言語を習得しようとするならば、それは不可能である事が分かるのである。即ち、彼らにおいては、彼らが言う事の [様々な] 音と行動の間には、何らの規則的関連もないのである。しかしそれでも、それらの音は余計ではないのである；何故ならば、我々が例えば彼らの一人に猿ぐつわをはめるならば、我々の一人に猿ぐつわをはめたときと同じような結果になるのであるから。彼らが言う事の音なくしては、彼らの行動は混乱に陥るのである——と私は言いたい。

我々は、この様な人々は言語——即ち、命令、報告、等々 [をするとき] に用いられる言語] ——を持っている、と言うべきであろうか？ 「音声言語」は持っていないが、「非音声言語」は持っている、と言うべきであろう。]

我々が「[音声] 言語」と呼ぶ [この土地の言語らしき] ものには、[行動との間に] 規則性が欠けているのである。

208. それでは私は、「命令」[という語] の意味や「規則」[という語] の意味を [それらの語と行動との間の] 「規則性」で説明するのであるか？ —— [更には、] 如何にして私は人に「規則的」「同様な」「同じ」[等

という語]の意味を説明するのであろうか? ——例えばフランス語のみを話す人には、私はそれらの語[の意味]を、それらに対応するフランス語の語で説明するのであろう。しかし、それらの概念を未だ所有していない人には、私はそれらの語[の意味を、即ちそれらの語]の使用を、実例によって、そしてまた練習によって、教えるであろう。——そしてその際は、[それが、私が与え得る全ての事例と練習によるのであるならば、(第75節を参照。)]私自身が知っているよりも少ししか教えないのではないのである。

そういう訳で私は、その教育において、それらの概念[——例えば「同じ」という概念——]を未だ所有していない人に、[例えば]同じ色、同じ長さ、同じ形を示し、彼にそれらを発見させ、[更には]それらを作らせ、等々、するのであろう。[また]私は例えば、「[同様に]その先を続けなさい、という」命令に従って、連続模様の先を「同様に」続けるよう、彼を指導するのであろう。——そしてまた私は、数列の先を続けるよう、彼を指導するのであろう。それ故、例えば、 $\cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot$  の先を  $\cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot \quad \cdot$  と続けるよう、彼を指導するのであろう。

[その際]私は、彼にそれをしてみせ、彼はそれを真似するのである; そして私は、同意、拒否、期待、激励、[等]の表現によって、彼に干渉するのである。[或るいは]私は彼をただ見守ったり、引き留めたり、するのである; 等々。

君がその様な教育の目撃者である、と考えよ。[君は、]その教育においては、如何なる語もそれ自身によって説明されることはなく、[したがって、]如何なる論理的循環も起きていない[、という事を見るであろう]。

「等々」(‘und so weiter’ ; ‘and so on’) という表現および「等々と限りなく」(‘und so weiter ad infinitum’ ; ‘and so on ad infinitum’) とい

う表現もまた、この教育において説明されるであろう。この教育には、なにかんづく、振舞もまた役立ち得るのである。「その様に続けて行け！」とか「そしてその様に引き続いて」を意味する振舞は、対象や場所を指示する機能と比較され得る機能を持っているのである。

省略した書き方である「等々」を、省略した書き方ではない「等々」から、区別しなくてはならない。[そして、]「等々と限りなく」は、決して省略した書き方ではない。我々は〔循環しない無限小数である円周率 $\pi$ を「3.14・・・」と書くが、この「・・・」は、省略した書き方ではないのである。円周率 $\pi$ を書けば、どこまで行っても、「・・・」は消えないのである。 $\pi$ の全ての桁を書くことは出来ないのである。そしてこの $\pi$ の全ての桁を書くことは出来ない、という事は、数学者は時折「それは人間の能力が足りないからである」と考えているが、[決して]人間の能力が足りないからではない。[ $\pi$ の全ての桁を書くという事は、全能なる神によってさえも、出来ないのである。したがって $\pi$ は、全能なる神によってさえも、見通せないのである。]

提出した例に留まろうとする教育と、提出した例を「越えて指示する」教育は、違うのである。[そして勿論、教育は本来、後者の意味での教育でなくてはならない。]

209. [(対話者は言う。)]「しかし、そうは言っても理解は [、与えられた] 全ての例 [を越えて、] よりも広範囲に及んでいるのではないのか?」  
— [(ウィトゲンシュタインは言う。)] [これは、一面では] 非常に奇妙な表現 [であり]、そして [他面では、] 全く自然な表現 [である]!

しかし、例による説明が全てであろうか? [(Baker & Hacker, *Wittgenstein—Rules, Grammar and Necessity* —, Basil Blackwell, 1985,

p.196,を参照。) もっと深い説明がないのであろうか; 或るいは, [例による] 説明の理解は, もっと深くなくてはならないのではないのか? —— さよう, そうであるとすれば, [説明を与える] 私自身が, [例による説明の] より深い理解を持っているのであろうか? [そしてまた] 私[自身]は, 私が [例による] 説明で与えるものよりも, より多くのものを持っているのであろうか? [実は, 持っていない。] ——しかし, そうであるとすれば, 私[自身]は [, 私が例による説明で与えるものよりも,] より多くのものを持っている, という感じは, 何処から [来るのであろうか]?

その感じは, あたかも私が, [長さが] 限定されていないものは, [実は] 如何なる長さよりも長い長さ [を持っているの] である, と解釈する様な [場合から来る感じに, 似ている] ものではないのか? [この分かりにくい文章は, 以下の様な事であろう: 私が, 以下の例の様に, 長さが限定されていないものを説明するとき, 実はそれは如何なる長さよりも長い長さを持っているのであるから, 私自身はより多くのものを持っているのだ, と感じるのである。例えばこうである。私が自然数列を,  $1, 1+1, 1+1+1, \dots$  という例で説明するとき, 私は, 私がこの説明で与えるものよりも, 自然数列について, より多くのものを持っている (理解している), と感じる。そしてその感じは, 自然数列は長さが限定されていないので, 幾らでも長く出来るのであり, したがって,  $1, 1+1, 1+1+1, \dots$  という例は, 私が理解している自然数列の一部に過ぎない, という感じから来るのである。しかし実は, ここには誤解がある。私が自然数列を  $1, 1+1, 1+1+1, \dots$  という例で説明するとき, 私がこの説明で与えるものは, 自然数列を構成して行く規則であり, その意味での自然数列の定義であって, この点に関しては, たとえ私が自然数列としてさらに長い  $1, 1+1, 1+1+1, 1+1+1+1, \dots$  という例

を持っているとしても、自然数列について、より多くのものを持っている (理解している) 訳ではないのである。「理解」と「事例」は混同すべきではない、というわけである。(Baker & Hacker, 前掲書 pp.196-198, を参照。)]

210. [対話者は言う。]「しかし君は彼に、君自身が理解している事を、実際に説明しているのか? [そうではなく、] 君は彼に本質的なことを推測させているのではないのか? 君は彼に例を与えた。——しかし彼はその例の趣旨を、したがって君の意図を、推測しなくてはならないのである。」—— [ウィトゲンシュタインは言う。] [そうではない。] 私は、私が私自身に与えることが出来る如何なる説明をも、彼に与えるのである。—— [もし]「彼は、私が思っていることを推測するのである。」という事 [が意味を為すとすれば、それ] は、彼には私の説明についての種々の解釈が思い浮かび、そして彼はそれらの内の一つを [私が思っている事として] 推しはかる、という事を意味するであろう。したがって彼はこの場合 [、私が思っている事について] 質問出来るであろうし; そして私は、彼に答えることが出来るであろう。そしてまた私は、[実際に] 答えるであろう。

211. [対話者は言う。]「たとえ君が彼に連続模様の先を続ける事を如何に教えようと、——如何にして彼は、自力で連続模様の先を如何に続けるべきかを、知り得るのか?」—— [ウィトゲンシュタインは言う。] さて、[私の場合、] 如何にして私は、自力で連続模様の先を如何に続けるべきかを、知っているのか? ——もしこの問いが、「私は、[自力で連続模様の先きを如何に続けるべきかの、] 根拠を持っているのか?」という問いであるとすれば、[これに対する] 答えは、こうである: 根拠は [、たとえ在っ

たとしても、その根拠の根拠は、と尋ねて行けば、いずれ] 間もなく尽きるであろう。そしてその暁には、私は、根拠無しに、行為するであろう。〔(第 217 節を参照。また、『確実性』の第 559 節を参照。)]

212. もし、私が恐れている或る人が私に、[私がよく知っている] 数列の先を続ける事を命令するとすれば、私は直ちに完全な確信を持って行為し、その行為には [実は] 根拠が無いという事が私を悩ますことはないのである。

213. [対話者は言う。]「しかし、この数列の初めの部分は、明らかに、様々に (例えば、代数的表現によって) 解釈され得るのであり、そしてそれ故、君は先ず最初に或る一つの解釈を選ばなくてはならないのである。」—— [ウィトゲンシュタインは言う。] とんでもない! [勿論] 事情によっては、疑いは可能であった。しかし、疑いは可能であった、という事は、私は [実際に] 疑いを持った、という事を言っているのではなく、また、私は [実際に疑おうと思えば] 疑い得た、という事を言っているのもない。(この事に関係して、[数列を展開するといった] 過程に付きまとう心理的「雰囲気」について、言うべき事が存在する。[(ここで言う「心理的「雰囲気」」とは、「確信の雰囲気」とか「疑いの雰囲気」とかであろうか?]))

直観のみが、この疑いを取り除くことが出来たのか? ——もしも直観が或る内的な声であるならば、——私は、私は直観に如何に従うべきかを、如何にして知っているのか? そして私は、直観は私を間違わないで導く、という事を、如何にして知っているのか? 何故なら、直観が私を間違わないで導くことが出来るなら、直観は私を間違っても有り得

るのであるから。〔第 217 節を参照。〕

（直観 [は] 不必要な逃げ口上 [である。]）

214. もしも直観が 1, 2, 3, 4, . . . という数列の展開に必要なのであるならば、直観は 2, 2, 2, 2, . . . という数列の展開にも必要なのである。〔「同じ」という直観が必要なのである、という事になろう。しかし、その様な直観は必要ではないのであり、実は、その様な直観は存在しないのではないか？〕

215. [対話者は言う。] しかし、同じ [であるという事] は、少なくとも同じ [であるという事] ではないのか？ [したがって、ここには何の問題も無いのではないのか？ 2, 2, 2, 2, . . . という数列の展開においては、我々は同じ 2 を続けて行けばよいのであって、ここには何の問題も無いのではないか？ 我々は、「同じ」という直観に導かれて、スムーズに進行しているのではないか？]

[ワイトゲンシュタインは言う。] 同じという事については我々は、絶対間違える事のない範例を持っているように思われる。[そして] 私はこう言いたくなる：「何れにせよ、物はそれ自身と同じなのである、という事においては、様々な解釈は有り得ない。彼が或る物を眼前に見るとき、彼はまた [その物はそれ自身と] 同じであるという事をも、見るのである。」

それでは、二つの物は、もしそれらが一つの物の様であるならば、同じなのであろうか？ そしてまた私は、一つの物が私に示す事を、二つの物の場合に如何に適用すべきなのか？

216. 「物はそれ自身と同一である。」〔『論考』 5. 5303 を参照。〕——

無用な、しかし想像の遊びとは結びついている命題で、[この命題よりも]より美しい命題の例は存在しない。「物はそれ自身と同一である。」と[いう命題で思われている事]は、あたかも我々が、想像のなかで、物をそれ自身の形に挿入し、[それから]ピッタリ合うのを見る、といった事であろう。

[そういう訳で]我々は、次に様に言うかもしれない：「如何なる物もそれ自身にピッタリ合う。」——或るいはまた：「如何なる物もそれ自身の形にピッタリおさまる。」かく言うとき人は、或る物を見つめ、そして彼は、空間はその物に場所をあけており、いまやその物は[その場所に]完全にピッタリおさまる、という事を想像するのである。[何という空虚な想像であろう！]

この模様は、それを取り囲んでいる白い周囲に「ピッタリ合っている」のだろうか？ ——しかし、もし、その模様の代わりに[それに先だって]先ず或る穴があり、そして今[その穴に]その模様がピッタリおさまったのなら、まさしくその模様は、それを取り囲んでいる白い周囲に、ピッタリ合っている様に見えるであろう。[しかし]このような像が、このような状況が、[先のパラグラフで言われた]「ピッタリ合う」という表現によってまさしく記述されているのである、という訳ではないのである。

[そして]「如何なる色の着いた模様も、それを取り囲んでいる[白い]周囲にピッタリ合う。」という命題は、同一性を表わす或る特殊な命題なのである。

217. 「如何にして私は、規則に従うことが出来るのか？」——もしこの問いが、原因に就いての問いでないならば、この問いは、私が規則に従ってその様に行為する事についての、正当化への問いである。



もし私が正当化をし尽くしてしまえば、[[『確實性』第192節を参照。)]  
 そのとき私は、硬い岩盤に到達したのである。そして[そのとき、]私の鋤  
 は反り返っている。そのとき私は、こう言いたい：「私は当にその様に行  
 為するのである。」[(第211節を参照。)]

(我々は時折説明を要求するが、それは、その[説明が与えてくれる]  
 内容のためではなく、それが説明の形式を持っているが故に、である、と  
 いう事を思い起こせ。我々の[説明への——今の場合は、正当化への——]  
 要求は[、言わば]建築様式上の要求なのである；その説明[——今の場  
 合は、正当化——]は、[結局は]何も支えない一種の飾り縁なのである。)

218. 数列の初めの部分は、言わば、見えない無限の彼方まで延びてい  
 るレールの見えている部分である、という考えは、何処から来るのか？  
 さよう、我々は、規則の代わりにレールを想像し得るであろう[から、で  
 ある]。そして、規則の限らない適用には、限りなく長いレールが、対応し  
 ているのである。

219. [ウィトゲンシュタインは言う。]「[規則の適用による、数列の]次  
 から次への延長は、実は全て、既に行なわれているのである。」[(第188節  
 を参照。)]という事は、[もしそれが意味を持つとすれば、]私はもはや如  
 何なる選択もしない、という事なのである。[対話者は答える。]規則は、  
 ひとたび或る一定の意味が与えられたならば、その規則に従った線を、空  
 の果てまでも引くのである。——[ウィトゲンシュタインは言う。]しか  
 し、もしその様な線が実際に在ったとして、その線は私にどんな助けにな  
 るのか？

何の助けにもならない；[[規則の適用による、数列の]次から次への延

長は、実は全て、既に行なわれているのである。」という] 私の記述は、それが象徴的に理解されたときにのみ、意味を持つのである。——と言うべきである、——と私には思われる。

私が規則に従うとき、私は選択をしない。

私は規則に盲目的に従う。[(第 211, 212, 213, 217 節を参照。)]

220. しかば、[[規則の適用による、数列の] 次から次への延長は、実は全て、既に行なわれているのである。」という] かの象徴的命題は、如何なる目的を持っているのか? それは、因果的連関と論理的連関の区別を際立たせる、という事を意図していたのである。

221. 私の象徴的表現は、実は、規則の使用の神話的記述であったのである。

222. 「線は私に、私は如何に行くべきかを、示唆する。」——しかし勿論これは、単なる像である。そしてもし私が、線は私にいわば無責任にあれやこれやを示唆する、と判断すれば、私は、規則として線に従う、とは言わないであらう。

223. 人は、人は常に規則の暗示(示唆)を期待しなくてはならない、とは感じない。反対に我々は、規則は我々に今いったい何を言うのだろうかかと、緊張している訳ではない。[言うなれば、] 規則は我々に常に同じ事を言うのであり、そして我々は、規則が我々に言うことを為すのである。

人は、自分が訓練している生徒に対して、言うことが出来よう: 「見なさい、私は常に同じ事をしている; 私は・・・」

224. 「一致」という語と「規則」という語は、お互いに血縁関係にある。それらは、従兄弟同士である。もし私が或る人に一方の語の使用を教えれば、それによって彼は、他方の語の使用をも習い憶えるのである。

225. 「規則」という語の使用は、「同じ」という語の使用と織り合わされている。「命題」という語の使用は「真」という語の使用と〔織り合わされている様に〕。

226. 或る人が、 $2x+1$  という数列を展開することによって、数列 1, 3, 5, 7, … を辿る、としよう。そして彼は自問する：「しかし私はいつも同じ事をしているのか、或るいは、その都度別の事をしているのか？」

毎日「明日君に会いましょう。」と約束する人は、——毎日同じ事を言っているのか；或るいは、毎日別の事を言っているのか？

227. 「もし彼がその都度別の事をしたならば、我々は、彼は或る [一つの] 規則に従っている、とは言わないであろう。」と言う事に、意味があるのであるか？ そう言う事には、意味がない。

228. [対話者は言う。]「数列は我々には一つの相貌を待っている！」—— [ウィトゲンシュタインは言う。] よろしい；では、どんな相貌か？ さよう、[それは] 確かに [代数式で与えられる] 代数的な相貌 [であり]、[代数式の] 展開の [初めの] 一部 [という相貌である]。或るいは、数列にはそれ以外の相貌もあるのか？ —— [対話者は言う。]「しかし、

相貌の中に既に全てが含まれているのではないか！」—— [ウィトゲンシュタインは言う。] しかし、相貌の中に既に全てが含まれている、という事は、[展開された] 数列の [初めの] 一部において、或るいは、[展開された] 数列の [初めの] 一部の中に我々が認める事において、[経験的に] 確認される事ではなく、我々はただ規則の言う事に注目して [展開を] 行なうのであり、それ以上の指導を求めはしない、という事の表現なのである。

229. 私は思うのだが、私は、数列の [初めの] 一部において、——無限に達するには唯その他に「以下同様」[という記号] を必要とするだけの特徴的な数列である——或る図柄を、全く見事に知覚するのである。

230. 「この線は私に、私の行くべき道を暗示する。」：これはただ、その線は私の行くべき道を示す最終審である、という事の言い換えに過ぎない。

231. 「それでも君は確かに・・・を見ている！」さて、これはまさしく、規則によって強制されている人に特徴的な表出である。

232. 規則は私に、如何に私は規則に従うべきかを、暗示する、と想定しよう；即ち、もし私がこの線を眼で追えば、内なる声が私に「この道を進め!」と語るのである。—— [さてしかし、] 一種のインスピレーション [である内なる声] に従って進むこの過程と、規則に従う過程の間の、違いは何か？ 何故なら、これら [二つ] の過程は確かに同じではないから。 [(原文では、ここに段落無し。)]

インスピレーションの場合には、私は [インスピレーションの] 指示を待つのである。[したがって] 私は、他人に [インスピレーションの指示に] 耳を傾ける仕方、[インスピレーションについての] 感受性、を教えたのではないならば、私は彼に線 [(規則)] に従う私の「技術」を教える事は出来ないであろう。しかし、私が彼に線 [(規則)] に従う私の「技術」を教える事が出来ないならば、私は勿論、彼がその線 [(規則)] に私がする様に従う、という事を、彼に要求することは出来ないのである。

このパラグラフで言われた事は、インスピレーションに従っ [て行なわれ] た行為についての、そしてまた、規則に従っ [て行なわれ] た行為についての、私の経験ではなく、それらについての、文法的な注意書きである。

233. 人はまた、或る種の算術の場合には、次のような教育を考えることが出来よう：[それは、] 或る種の算術の場合には、子供たちは——ただ内なる声に耳を傾けてそれに従う限り——各人が各人の仕方 で計算する事が出来る [、というも] のである。この計算は、作曲の様であろう。

234. しかしまた我々は、[現に] 我々が計算するように (全員が一致した、等々の、) 計算をするのだが、しかもなお、[計算の] 各段階において、魔法によつての様に、規則によつて導かれているという感情を——恐らくは、我々が一致した計算をするという事に驚きながら——持つという事が出来ないであろうか？ ([そして我々は、] たとえば、この一致を神に感謝 [するであろう]。)

235. 我々がこの [前節で言われた] 事から見ることは、全て、我々が日

常生活において「規則に従う」と名付ける事の外面的特徴である！

236. 正しい結果には達するのだが、しかし、如何にしてかは言うことが出来ない巧妙な計算家達 [について考えよ]。我々は、彼らは計算をしているのではない、と言うべきなのか？ ([計算という事についての、種々な] 場合の家族 [を考えなくてはならないであろう。])

237. 或る人が規則としての或る線に以下のような仕方で従った、と考えよ：彼はコンパスを持ち、その一方の脚をその規則としての線に沿って動かし、その間他方の脚で線を引くのであるが、その線が当の規則に従っている、というのである。しかも彼は、その様にして [その一方の脚を] その規則 [としての線] に沿って [動かして] いる間、コンパスの開きを、非常に正確さでもっての様に、変えるのであるが、その際彼はずっとその規則 [としての線] を、あたかもそれが彼の為す [べき] 事を決定するのであるかの様に、注視するのである。さて、彼を観察している我々は、コンパスのこの開閉に、如何なる規則性をも見出さないのである。[更にまた] 我々は、[規則としての] この線に従う彼の仕方を、彼から習うことが出来ないのである。ここに於いておそらく我々は、実際、次のように言うであろう：「手本 [(規則としてのこの線)] は、彼に如何に為すべきかを、示唆するかのように見える。しかしその手本は、規則ではないのである。」 [この例は、規則に「私的に」従う、という事の例であろう。(第 202 節を参照。)]

238. 私にとって規則が、その [適用がもたらす] 全ての帰結を予め生み出してしまっているかの如くに、見え得るためには、その全ての帰結は、

——この色を「青」と呼ぶことが私にとって自明であるように——私にとって自明でなくてはならない。（「これは私にとって「自明」である」という事の規準 [について、考えよ。]）

239. 彼が「赤」という語を聞いたとき、彼は、どの色を選ぶべきかを、如何にして知るべきなのか？ —— [対話者は答える:] 非常に簡単だ；彼は、その語を聞いたとき彼の念頭に浮かぶものが、その色の像になっている色を取るべきなのだ。—— [ウィトゲンシュタインは問う:] しかし彼は、どの色が「彼の念頭に浮かぶものがその色の像になっている」色であるのかを、如何にして知るべきなのか？ そのためには、更に規準が必要なのか？（或る人が、「・・・」という語を聞いたとき、彼の念頭に浮かぶ色を選ぶ、という過程は勿論存在する。〔この括弧内は英訳による。〕）

「赤」は「赤」という語を聞いたとき私の念頭に浮かぶ色を意味する。」—— [これは] 一つの定義であろうが、語による記号づけの本質についての説明ではないであろう。[そしてそれは、たとえ定義であるとしても、働かない定義であろう。何故なら、「私の念頭に浮かぶ色」というものは、それが何であれ、私的対象であるのであるから。（第 380, 381 節を参照。〕]

240. （例えば、数学者達の間では、）規則に従って [計算が] 行なわれたか否かについて、論争が勃発するという事はない。その様な事について、例えば、暴力沙汰になるという事はない。この事は、そこで我々の言語が（例えば、記述を与えるという）働きをすところの、足場に属するのである。

241. [対話者は言う。]「それでは君は、人間における一致が何が正しく

何が誤りであるかを決定するのだ、と言うのか？」—— [ウィトゲンシュタインは言う。] 正誤は、人間が言う事である；そして、言語 [ゲーム] において人間は一致する。この事は、[言語ゲームにおいて人間は、] 意見が一致するという事ではなく、生活の形式が一致するという事なのである。

242. 言語による意志の疎通 [が可能であるため] には、定義における一致のみならず、(奇妙に響くかも知れないが) [定義に基づいた] 判断における一致も [また] 不可欠なのである。この事は、論理を破棄してしまう様に思われる [。何故ならば、論理は、定義における一致に基づいているとはいえ、定義に基づいた判断における一致は不可欠ではないと思われるから。]; しかし、そうではない。—— [例えば、] 測定方法を記述するという事 [(これは定義である。)] は、一つの事であり；測定結果を見出だしてそれを述べるという事 [(これは定義に基づいた判断である。)] は、別の事である。しかし我々が「測定」と名付けるものは、測定結果のある種の恒常性によっても、規定されているのである。[測定結果にある種の恒常性がなければ、測定という事はあり得ないのである。そしてこの事は、論理においてもまた、(奇妙に響くかも知れないが、) 定義に基づいた判断における一致がなければ、論理というものはあり得ない、という事を物語っているのである。これは、アリストテレスからフレーゲ・ラッセルにいたる伝統的な論理概念の破棄である。言語による意志の疎通 [が可能であるため] には、定義における一致のみならず、(奇妙に響くかも知れないが) [定義に基づいた] 判断における一致も [また] 不可欠なのであるという事は、論理を破棄してしまうのではなく、実は、アリストテレスからフレーゲ・ラッセルにいたる伝統的な論理概念を破棄してしまうのである。]